

## 埼玉大学蔵『烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條』解題と翻刻

武井和人  
高梨素子

### 【解題・I】

本書は、平成2年度に埼玉大学が大阪心斎橋中尾書店から購入したものである。同書店刊『古典籍目録』(平2・10)六頁に掲載されている。価格は四万五千円。埼玉大学教養部武井研究室所蔵(九一・一・一・Ka・養文学・九〇・〇五一二二)。なほ、本書は学術情報センター(NACSIS-IR)のデータベース(JBCAT)に登録されている。書誌は以下の通り。

袋綴装(原装) 1冊。27・2×18・7cm。表紙は水色地布目押文様の厚手の楮紙。題簽(粹なし)が表紙左に貼付され、「烏丸垂相〔口傳／和歌式目〕」と墨書される。題簽は本文と同筆と思はれるので、原題簽と見てよからう。端作題「烏丸垂相口傳資慶卿」。「烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條(端作題)」を合写する。以下小論で翻刻を試みたのは後者の「烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條」である(その理由は後述。なほ前者の「烏丸垂相〔口傳／和歌式目〕」は翻刻を付さなかったが、その代りに比較的詳しく解題を施した)。全巻一筆。墨付及び構成は以下の通り。まづ最初に『烏丸垂相口傳資慶卿』が1丁表から3丁裏まで書かれ、次に『烏丸資慶卿

和歌式目 二十五ヶ條」が4丁表から8丁表まで書かれる。なほ8丁表は裏表表紙見返しを用ゐるので、実質的な墨付は7丁といふことになる。遊紙は存しない。本文料紙は楮紙。本文一面8行。朱・墨等による書き入れ・付箋等はない。蔵書印等旧蔵者を示すものは何も残されてゐない。表紙見返し中央に埼玉大学所蔵の由を示す小紙片が貼られてゐるだけである。江戸中期写。虫損・汚損等はなく保存は極めて良好である。(武井)

### 【解題・II】

『烏丸垂相〔口傳／和歌式目〕』には、二種の書が含まれる。「烏丸垂相口傳資慶卿」と「烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條」である。【解題・I】でも触れた如く、二書は同一の筆跡に依り、奥書はない。

烏丸資慶は、烏丸光広の孫にあたり、後水尾院後期の歌壇で活躍した堂上歌人である。官位は正二位権大納言に昇り、歌に秀れ、寛文四年に後西上皇、中院通茂、日野弘資とともに、後水尾法皇より古今伝受を受けた。光広以来の和歌の家柄を継承して、資慶も関白二条光平以下、公家・武家・その他の地下歌人を教えた。

此二種の書は、門人たちへ和歌指導を内容としていられると思われ、まず前者は、日本歌学大系巻六に「資慶卿口伝」の題名で収録されているものと、ほぼ同内容である。板本の刊行はなかったようであるが、写本が幾つか残り、従来、資慶の著作として知られている。

管見に触れた写本には次のようなものがあるので、書名及び奥書を記す。

①鶴舞中央図書館蔵『詠歌一鉢』所収、内題「資慶卿詠方」

右一卷者、烏丸故大納言資慶卿御作也。去御方より御所望につき被進之云々。聊他見あるへからざるものなり。源頼永

仲一卷、從烏丸資慶卿、伝細川丹州牧行孝、資慶卿賜筆頭門人源頼永也。且頼永門弟源完長ヨリ伝之。彼以草案写之畢。宝永四仲夏上旬 源重共

②東北大学狩野文庫蔵『資慶卿教訓 全』、内題なし。

右一卷者、烏丸故大納言資慶卿御作也。從去御方依願望被進之云々。努々不可有他見者也。宝永八年辛卯二月 源安宗

右一書者、昔年資慶卿武江在府之時、亡父良隆親炙而受教之口伝、亦如此可為詠和歌根本者也。宝永辛卯三月 源良 顯

③天理図書館綿屋文庫蔵『烏丸重相資慶卿口授』巻末所収、内題「烏丸資慶卿詠方口伝」

右一卷者、烏丸故大納言資慶卿御作也。從去御方依願望被進之云々。聊他見他言不可有者也。新玉津嶋社社主、正六位下藤原

章尹 寛文三癸亥年八月三日

①④本

2、おなじく資慶の書とするが「片かなを以て」とするもの……

⑤本

3、資慶とかかわる奥書をもたないもの（含、奥書無）……⑥⑦および本書

となる。①②⑤の奥書によれば、宛先は細川丹後守行孝である。①によると、その草稿より一本が生じて、頼永・完長と伝わり、宝永四（一七〇七）年源重共が書写している。なお、重共奥書中に「仲一卷」とあるが、①では、『詠歌一鉢』の巻頭に収録されており、親本での合冊形態を示すのか、あるいは「件一卷」の誤写などか不明。次に②は、①と同系統の写本と思われるが江戸の伴部安宗が宝永八年に書写している。その後にある、安宗の師、跡部良頭による奥書は、良頭の父良隆が資慶に師事したことを述べ、同書の価値を述べた一種の加証奥書と思われる。なお③の奥書は日付の内容に疑問があり、また普通は署名の前に来る筈のその位置もおかしい。寛文三（一六六三）年は、癸卯に当たり、資慶はまだ生存しており、章尹は寛文十年誕生故まだ出生していない。天和三（一六八三）年癸亥の誤りとも疑われるが、章尹がまだ年若いので、それでも疑問である。また⑤の奥書は資慶の享年四十八歳を誤って記しており、文中、定家の『一紙抄』とあるのは不明。

内容は諸本により大差がないが、⑥神宮文庫本と本書の二本には、他本に較べて同箇所に欠文がある。第三、句の吟味に候……くたけてせはしく候」のあとに、「尤可有吟味鍛練候。能次而候」(①本によ

④久曾神昇氏蔵通経筆本『資慶卿口伝』(日本歌学大系所収本)、内題不明。

右、烏丸故大納言資慶卿從去御方御所望、被進之。不可有他見者也。

⑤名古屋大学皇学館文庫蔵『烏丸資慶卿和歌詠方』、内題同じ。

右、資慶卿より片かなを以是をかきて細川丹州行孝につくると云々。

此一冊、本書はかたかななるを人の望によりてあらためうつし、あたふる也。此卿は烏丸一家の名匠にして、法皇後水尾院、殊に御感の哥人なり。五十二歳にして逝去。辞世に

さめにけり五十の夢に見しはなに

たつたのもみちみよしの、雲

此よみかた、おそらく定家卿の一紙抄にとるました有かたきおしへなるへし。しんせつならざる輩にみたりに書写をゆるし給ましく候。あなかしこ。

⑥神宮文庫蔵『烏丸資慶卿口伝』、内題「烏丸資慶口伝」

從師家被相惠写之 慶徳氏家雅

⑦刈谷図書館『続耳底記』巻末所収、内題「烏丸殿遺訓」

(全体の奥書) 元文五庚申仲春、得不可思議因縁密写。

不許他見者也。 鉄花叟(花押)

奥書により諸本を分類すると、

1、小異はあるが大体「右一卷者、烏丸故大納言資慶卿御作也。

去御方より御所望につき被進之云々。」の奥書を持つもの……

る)が、また、「右三の要意はかりを御心にかけて候へく候」の末尾から、「かけられ候而、朝夕御稽古可然候。唯今の御歌今少御稽古候へは、一きはあかり可申候。さて最早日本国中にて詠草はつかしけなく指出さるへく候。それは三つの稽古、首尾の上にて成就する事也。風脉姿など、云事は努々御心にかけてられ候ましく候也」(同)と入る本が多い。前者は省略されたともみることできるが、後者はあった方が文脈のつながりがよく、誤脱であろうか。本書は神宮文庫本と同系統本といえる。神宮文庫本の奥書に言う慶徳家雅の師とは誰か不明。

宛先の細川行孝は肥後宇戸三万石の大名で、細川幽斎の曾孫に当たり、父立孝と資慶母が兄妹である所から、資慶とは従兄弟になる。行孝が資慶の説を聞きした『続耳底記』があり、行孝二十五歳、資慶四十歳の寛文初年頃より師弟関係にあったかと思われる。『続耳底記』中にきわめて内容の類似する部分があり、本書を資慶の行孝に宛てた手紙と見て妥当かと思われる。類似箇所を参考のために挙げると、

道理を、強、つふくといひたて候へは、さまいやく凡俗になる事に候。風情妖艶にと求候へは、若は聞えかね候事に候。

此間を幾重もくけいこ候へく候。哥の練磨此一事に候。無他候。姿詞、優美にえんに、心正く直なるを大事に仕事に候得共、

それは初心の人なりかたく候得は、先、心能聞え、詞つよくすくやかに詠たるか能候。先如此、御稽古有へく候。(九州大学細川文庫本)

さて、この『口伝』の成立時期を知る手掛かりとなるのは、新院御会での七条羽林の歌が文中に引用されていることである。この新院は、寛文三年正月二十六日に讓位した後西上皇のことと考えられる。いつの御会のものであるか御会集の資料を得ることはできなかったが、天理図書館蔵『歌道雜記』中に

山家鳥 隆豊朝臣

庵ちかき松吹あらしとりのこゑ都にかはる山のおくかな

右、松吹あらし、とりのこゑとあらは、都にもにぬとあらへし。又松のあらしも、とりのねもとあらは、都にかはるとあるへしと法皇被仰。

という同内容の記事が見られる。『歌道雜記』は寛文三年より六年にいたる、備忘録とでもいうような内容の書であり、この後の記事が寛文六年二月であるので、それ以前のことになる。また七条羽林は隆豊であることがわかる。『公卿補任』によると隆豊は万治二年正月より寛文十年正月まで四位、その間左少将や左中将であり、該当する。この記事は寛文三年より六年の間の御会での事で、こうした法皇の指導はこれに限らず、往々見られたようであるから(『資慶卿口授』)、指導を受けて比較的近い時期に『口伝』が書かれたと思われる。

次に本稿で翻刻を試みた『烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條』は他所に知らない孤本である。本文が二十二条しかない理由については、題名を区切りの良いものとした、後で足す計画であった、三ヶ條が欠脱したなど考え得るが、不明。内容の特徴としては、次の三

点をあげられるかと思う。

(一)「歌は陰陽和合を本とす」(1)、「神慮によくかなふやうによむ事第一也」(2)など、神道的とでもいうような思想がうかがわれること。

(二)「正直の二字をはなれてはあるへからず。よく心をめくらして詠すへし」(3)とあり、また巻末の図に心正直を中心とすること。

(三)題の詠み方に関する、抽象的な記述が多いこと。(7、12)

さて(一)のような記述は資慶の他の著作には見られないものである。(二)は、『続耳底記』の先程引用した中に「姿詞、優美にえんに、心正く直なるを大事に仕事に候得共」云々とあり、また

所によりふかぬ風をも吹せ、又なき事をもいふを哥の寿命と云。二条家相伝之秘事にて候。されはとて虚妄をいふことにてはな候。心は正く直に実候而、其実の心のさかりを云事にて候。是は大事にて候。(九大本)

などであるのを思わせるが、「心正く直に」の意味であるとしたら、「正直の二字をはなれてはあるへからず。よく心をめくらしして詠すへし」という文章は舌足らずな感を否めない。また巻末の図式は資慶の他の著作に見ないものである。さらに第二十条「返哥は其歌のことにあはせて、其心を問答するやうによみて宜し。又心さへ其返事に応ずれば異様のこと葉をもてよむも面白し。」の傍線部のような考え方は、『資慶卿消息』の中で、

初学の人、和歌を習はむは、先こゝろざすところ選びて用意あらむものぞかし。おほよそ世のことわざ深淺有り、清濁あり、

詞のつゞけがらについては、たとえば資慶息光雄による『光雄卿口授』にも記載があるが、

一、惣じて和歌は、一首の法立、始より言葉はそければ五もじよりほそくつゞけ、ふとくつよければ五句ともふとくつよき詞にてつゞけ、又、まろければまろく、兎角一首上下のかけあひよろしきやうによむべしと也。(日本歌学大系巻六)

一、惣じて和歌はつゞけがらによりて、言葉のよしあし、或は金玉の句とも成る事に侍る。後京極殿のきりくすの和歌を、金玉の句といふ事は一首のつゞけがら、仕立て給ふ所のよろしきゆゑとなり。(同)

などであり、以下、きわめて具体的な説明に終始する。

また、二十五ヶ條という書名には資慶の曾孫光栄による『和歌教訓十五個條』が連想されるが、その中では、詞のつゞきに関しては、一、常々ありふれたる題のよみやすきにて、詞つゞき優美に、心の力あるやうに詠習肝要也。(日本歌学大系巻六)

とあり、簡単に「詞つゞき優美に」とだけあって、「上下の言葉のつゞけがら」には言及せず、「常々ありふれたる題のよみやすきにて」詠習えという更に多くの内容を持つ条項となっている。ちなみに、十五個條の第一は、

一、歌道以実為専要義、常々忘却有るべからざる事。(同)をあげているが、その他の条々は、制詞への注意、速吟の戒め、事むつかしき趣向・異様なる詞・むつかしき題の禁止、古歌熟覽の勧め等々、内容が具体的かつ豊富である。

高下有り、深き水はながれとほし。よりて代につたはり、国にひろまれるなるべし。清きはたかし、俗を出で凡をこゆ。猶精神にしてまこと有なれば天地をうごかし、鬼神を感ぜしめ、人民を和す。これ唱歌の徳といへり。あさは流みじかく、濁れるはいやし、殊に偽りかざりことやうならんは、狂言妄語の罪のがれたし。(日本歌学大系六)

と説いて、和歌が狂言妄語であることを戒めた資慶の発言とは思われない。さて以上のような点から、資慶の著作とは思えないのであるが、一方、本書がどのような書の影響を受けているかを考える手掛かりがある。(21)に

歌は上下の言葉のつゞけからにて、つよくもよはくもきこゆる也。又、俗なる詞をもつゞけからにて優美に艶にきこゆる也。よく心をめくらし、味ひ詠する事専要也

とあるのは、藤原定家の『毎月抄』に

哥の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて、強弱大小侍るべし。それを能々見したゝめて、つよき詞をば、一向にこれをつゞけ、よはき詞をば又一向に是をつらね、かくのごとく案じかへしく、ふとみほそみもなく、なびらかに聞きにくからぬやうによみなすがきはめて重事にて侍る也。申さば、すべて詞に、あしきもなくよろしきも有るべからず。たゞつゞけがらにて、哥詞の勝劣侍るべし。(日本古典文学大系)

とあるのを、想起させる。

本書は、具体的な実作指導の傾向の強い歌書ではなくて、むしろ『毎月抄』のような抽象的な記述を含んだ歌論書をふまえて言及しているように思われる。第十四条の本歌取についての言及も『毎月抄』を思わせるのであるが、同書を読んでいるとすれば、心論論、十体論などに及んでいない点が疑問であり、後世の歌論書に拠る同書の間接的かつ部分的享受とも思われる。

『毎月抄』については、『光雄卿口授』に

六部抄の内、毎月抄よし(天理本)

とあり、堂上派で推奨される本であり、時代を遡って佐方宗佐の『細川幽斎尊翁問書』にも、少し下って、武者小路実陰述・似雲記の『詞林拾葉』にも引用部分はそのまま引かれている。

本書は、いかに詠むべきかについて、抽象論に終始している感があり、ひとつの特徴といえる。逆にそうした所から、『資慶卿口伝』『資慶卿消息』などに抽象的な論を展開している資慶に、仮託されたとも思われる。近世堂上派の流れを受け、やや神道的考えを持つた人の著作であろう。(高梨)

#### 【凡例】

- 一、埼玉大学教養部武井研究室所蔵『烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條』を底本に翻刻した。合写されてゐる『烏丸垂相口傳資慶卿』は既に『日本歌学大系』に翻刻されてゐる著名な資料なので、翻刻対象とはしなかった。
- 一、翻刻に際しては、底本の表記を極力残すべく行ったが、以下の方針にしたがって、若干の手入れを行った。

一、漢字・仮名を通行の字体に改めた。ただし、哥・歌は区別した。

一、仮名遣・かな漢字の宛て方は底本のままとした。

一、底本の丁・面の変はり目を才・〆の如く示した。なほ、丁数は本書の最初に置かれる『烏丸垂相口傳資慶卿』から起算したものである。

一、各段末尾に通し番号を付した。(武井)

#### 【翻刻】

烏丸資慶卿和歌式目 二十五ヶ條(端作題)

一歌は陰陽和合を本とす和合せざるは哥の道にあらず(1)

一神慮によくかなふやうによむ事第一也神慮にたかふはうたの道にあらず(2)

一正直の二字をはなれてはあるへからすよく心をめくらし詠すへし(3) 4

一心のうちにあるを志といひ詞にあらはるゝを哥といふ事理の当然なり(4)

一歌はまろくよむへし角らしき処は哥の道にあらず詞にも心にも円なると方なるとあり思慮すへし円なるは陽のかたちにして仁心なり仁はよく万物をやしなひめくみて道成就すこれ歌をもて人倫をやはらけしたしむ我朝の道なり(5)

一哥は上より下までよみくたしてすら〜と滞〜ゆなき事環のはしなきやうによむへし(6)

一題にむかひては先趣向をよく案し極て後詞をもとむへし詞をさきたて、趣向を後にすれば詞にひかれて実ぬけ正体なきやうにてよ

はし長高くつよく丈夫によむへし哥は詞やはらかなるによりてそのころえなければ歌のすかた心までよはくて正しからず(7)

一年始の哥祝言などは猶以ひときはすかたこと葉 5つよく丈夫に長をよむへし(8)

一花月うたは風流にさらりときこえて景氣に余情ふかく詠すへし(9)

一恋の歌は艶にやさしくころ深くよむへしされともたはれたるはわろし(10)

一述懐無常のうたはその品〜に應して深く味ひて読へし驛旅のうたは天子高位たりとも侘たるやうによまされは興なし是哥の寿命也(11) 5

一離別のうたはあはれに心をこめてよむへし(12)

一長哥はあまり限もなくなかきはかへりて興なし反哥に長哥の大意の理正しくよむへし

一旋頭哥は古風によまされは見くるし(13)

一古詩古謡のころをとり詞をとりてよむ事いかにも其心をよく味ひ吟して耳にた〜さるやうに和らけてかすかにしかも又其事と聞るやうに読へし(14) 6

一哥は詞をかさねあまりことほり過たるもあしくいひたらさるは猶あしく其ほとをよく味ひて詠すへし(15)

一陽の句と陰の句とよく和合するを歌の本体とす上下かけ合ちかひ

ては道にたかふ也(16)

一秀逸の哥には大方序哥おほしされとも序哥はかりをすき好事は斟酌すへし(17)

一人に哥を贈るに其趣のものをよみかくしあらぬ 1の事をいひて心をそれと通るやうにいひめくらすもよろし(18)

一返哥は其歌のことはあはせて其心を問答するやうによみて宜し又心さへ其返事に応すれば異様のこと葉をもてよむも面白し(19)

一歌は上下の言葉のつ〜けからにてつよくもよはくもきこゆる也又俗なる詞もつ〜けからにて優美に艶にきこゆる也よく心をめくらし味ひ詠 1つする事重要也(20)

一哥は千丈の滝を見るやうに詠すへしすへて風体眼目也(21)

右条目常にわすれずして詠すれば読そこなふ事あらずよく〜智恵をはたらかして詠すへし和哥の秘事これに過へからす深く心底におさめてみたりに口より外へ出す事なかれ(22) 7

朋友

夫婦

天地

陽陰

心正直

神人

君臣

父子

兄弟 8

口ノ伝

【執筆分担】

校正	高梨・武井
翻刻	礎稿Ⅱ武井 点検Ⅱ高梨
凡例	武井
解題・Ⅱ	高梨
解題・Ⅰ	武井

平成3年10月31日発行

編集兼  
発行人 埼玉大学教養部  
浦和市下大久保255番地

印刷所 埼玉総合企画印刷協同組合  
埼玉県岩槻市仲町1-10-13  
電話 048-757-2476